
絶対に気に入ると思う

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対に気に入るとと思う

【Zコード】

Z9211C

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

僕と彼女はクラスメイトも認めるベストカツブルだったが、今は惰性で付き合いを続けていたに過ぎなかつた。ある日、彼女が新しいボーイフレンドを連れてきて三人の奇妙な関係がはじまつた。

「絶対に気に入ると思う」と彼女は言った。

何の話だったのか、もう思い出せない。すげく退屈で、何か面白い事はないかと聞いたのだったかもしれない。

そして彼女が答えた。

「絶対に気に入ると思う」

塾のない日はいつも、彼女の家に行つた。そして何もしなかつたり、したりした。音楽を聞く事もあった。彼女の好きなビジュアルバンド、僕の好きなクラシック。

僕らはいつも退屈だった。けれど、あまり外に出掛けたりはしなかつた。

コンビ二なんてなかつたし、映画館まで一時間以上、電車に揺られなくてはならない。

田舎ともいえるし山奥ともいえる。僕の家も似たようなもので、ただ、少しだけ彼女の家の方が大きかった。

僕と彼女はクラス公認のベストカップルで、実際には既に別れているのだが、退屈だから一緒に居た。

何も考えていない彼女と何をするのも面倒な僕はお互いになくてはならない存在だった。

双子のように姉弟のように、長年連れ添った老夫婦のように、いつも一緒に居た。

僕らの間にあつたのは取り決めではなく情性だった。だから、そこには何の約束もなかつた。

僕は今更、彼女に愛や友情を確認する事すらできない。心がなかつた。ただ、システムだけがそこにあつたように思う。

ある日、彼女は言った。

「絶対に気に入ると思う」

彼女は新しいボーイフレンドを僕に紹介した。

活発で聰明な好青年。そんな印象を受けた。確かに、人として僕は彼を気に入つた。

けれど、僕の心は明らかに混乱していた。この二人の間で僕はいつたい何者になり得るだろうか。

それからもしばらく、奇妙な関係が続いた。彼女と彼女のボーイフレンドと僕だ。

僕は彼女の心の在り処を知りたいと思つた。一言でいいから、「もう会いたくない」とか

「一人だけにさせて」と言つてくれればいいのに。

僕が、自然に身を引けばいいのだろうか。けれど僕の心は実際は、それとは正反対の事を期待しているのだ。

一人は僕に見せつけるように愉しそうに喋つた。時には体に触つた。

僕はその間、ずっとそれを見ているか、ヘッドホンで音楽を聞いた。

彼女のボーイフレンドは、とても良いやつだつた。僕が意見を求めるべし、しっかりと自分の考えをまとめて分かり易く述べた。

それに彼は、僕の聴くクラシックの曲を聴いて、とても気に入ってくれて、彼自身の好きな曲を挙げる事すらやつてのけた。

僕は彼女の言つたように彼を気に入るしかなかつた。彼を嫌う要素というものはたつた一つを除いてあり得なかつた。

彼女と彼女のボーイフレンドは、とてもお似合いに見えた。僕がそれを言つと、皮肉に聞こえるので言わなかつたが、本当にそう思つた。

一人が喧嘩している時は、不本意ながら仲裁に入つたし、彼女が不在の時でも彼と会えば話をした。

そのうち、僕は解らなくなつていた。僕が好きなのは誰か、彼女が好きなのは誰か。

やがて、彼は僕のことを好きだと言った。僕は彼女の事を好きだと言った。

彼女だけは何も言わなかつた。

好意と愛情は違つた。表面上は上手くいっていた僕らの関係は、どこかおかしかつた。

あるいは、僕らは誰も好きにならない、自分が大好きで、それ以外には興味はないかもしれない。僕の心は嘘をつく。きっと素直じやないんだろう。

そして、彼女と彼女のボーイフレンドである彼と僕の三人の関係に決定的な別れが訪れた。

彼女は、他に好きな人ができたといって僕らを追い出した。

僕と彼の二人という意味だ。

彼女が言ったように、僕は彼を気に入つていた。僕は以前ほど彼女のこと好きだとは思わなくなつていた。

彼も同じように、彼女への愛情が薄れた事を打ち明けた。

「絶対に気に入るとと思う」

という彼女の言葉が呪いのように耳に張り付いていた。

彼女の新しいボーイフレンドは僕には到底、気に入ることのできない輩だつた。

胸元を広く開けて、髪を金色に固めたロックバンドのボーカルだ。僕は彼女の事を懐かしむ代わりに、彼女の元ボーイフレンドの家に通うようになった。

そして初めて、僕は僕自身の心の在り処が分かつた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9211c/>

絶対に気に入ると思う

2010年12月10日02時05分発行